

ヨーロッパ言語共通参照枠（MCER）と日本の 大学におけるスペイン語教育

— 読解授業と教材 —

江 澤 照 美

1. はじめに

「ヨーロッパ言語共通参照枠」(Marco Común Europeo de Referencia para las Lenguas; 以後 MCER と略記する¹⁾) は、ヨーロッパ評議会 (el Consejo de Europa) により制定された言語教育の指針の集大成である。ヨーロッパ評議会が現在推進している言語政策により、ヨーロッパ域内の言語教育は複言語主義 (plurilingüismo) によって裏付けられた MCER を通じてその内容の充実が図られつつある。同時に、ヨーロッパの各言語の試験を相互に関連づけるという ALTE (=Association of Language Tester of Europe ヨーロッパ言語テスト協会) のプロジェクトや言語学習者各人の学習歴や語学力を参考可能にする PEL (=Portfolio Europeo de las Lenguas ヨーロッパ言語ポートフォリオ²⁾) の開発・導入によって、ヨーロッパで生きる人々は生涯を通じて複数の言語を積極的に学ぶことを奨励されている。このようなシステムのもとで母語以外の言語や異文化に理解を持つ人々が増えればヨーロッパ域内での人的交流が進み、相互理解が深まることになる。ヨーロッパ内の多文化・多言語を文化遺産とみなしているヨーロッパ評議会は、MCER の制定や PEL の導入によってその遺産の永続的な保存を目指し、現在その理念の具現化に向かっているのである。

MCER はヨーロッパの言語教育関係者に対して極めて示唆に富む判断基準や数多くの課題を提示している。言語教育関係者たちは MCER の提案の妥当性を各人・各機関の教育環境に照らし合わせて検討し、従来の教育体制の見直しを図ったり、生涯学習への支援を行うことが期待されている。

そして、現在ヨーロッパ各国においてこの言語教育改善の動きや成果は少しずつ目に見える形で現れていると言える。スペイン国内の ELE 教育機関においてもセルバンテス協会を中心に MCER の基準をもとに言語

教育や教材開発、評価方法の見直しが進められている。MCER の第三章において具体的に提示されている「共通参照レベル」(Niveles comunes de referencia; 以後 NCR と略記する³⁾) は段階的に設定された熟達度のレベルであり、スペイン語に関しては、DELE の Inicial, Intermedio, Superior の各級の熟達度が NCR の中で位置づけられることにより、学習者に求められる言語上のスキルの内容が従来よりも明確になった。

さらに詳細は後述するが、近年スペイン国内で出版されている ELE 教材及び E/L2 教材もその対象とする学習者のレベルが NCR のどの段階に相当するか明記されるようになった。さらに NCR の基準を意識して、改訂版が出版された既刊教材もある。

このように、MCER は今やヨーロッパの言語教育関係者にとって無視できない指針であり、MCER の基準に沿って従来の教授法を見直すという試みはスペインでも盛んに行われている。関連する出版物としては、例えば、Fernández (2003) は MCER を踏まえつつ学習者の興味を持続させるタスク主体のカリキュラム開発のためのアイデアを提示している。また、教授法に関する専門誌である *Carabela* は第 57、58 号の 2 号連続で MCER を踏まえた ELE 教育向け提言の特集を組んでいる。このような MCER を視野に置いた教材開発や教授法研究は今後一層盛況を迎えることが予想される⁴⁾。

そして、MCER はヨーロッパのみならず世界の他地域の言語教育関係者にとっても有益な指針となりうるものである。筆者もスペイン語圏とは遠く離れた国で ELE 教育に従事する教師の一人として MCER が我々に投げかける数々の疑問を受け止め、その問題点を分析し、日本における今後のスペイン語教育が目指すべき方向を問い合わせたく思う。MCER が関連する分野は語学教育の広範囲に及ぶため、教育関係者が取り組まねばならない課題は山積しているが、まずは各人の教育環境や方針の見直しなど身近なところから始めるのが適切であると考える⁵⁾。

そこで本稿では、江澤 (2000) の主題であった日本のスペイン語学習者の読解能力向上の方策について、近年登場した MCER と関連づけて再考する。また、MCER によって ELE 教育が現在受けている影響について把握し、とりわけ大学在学中に中級レベルの語学力習得が期待される日本の大学のスペイン語専攻学生を対象とした語学教育が将来めざすべき方向を探る⁶⁾。

2. 日本の大学のスペイン語教育

2-1. 「講読」一辺倒からの脱却

筆者は江澤（2000）において、従来のいわゆるスペイン語講読の授業において受講生のレベルや嗜好に合致した教材を探すことの困難さや授業運営及び評価に関して生じるいくつかの問題点を指摘したが、これはスペイン語専攻学生、第二外国語としてスペイン語を履修する学生のいずれにも概ね関係し、共通する問題であった。また、日本において日本人教師が担当する外国語の講読の授業は主として文法訳読法によって進められ、なるべく辞書の力を借りずに読解力を向上させるための多読や速読の訓練はあまり行われていない。

文章を読む能力を向上させるために、時として辞書に頼りながらでも1冊の文献をじっくり時間をかけて読み解く能力を身につけることはもちろん必要なことである。しかし、そのような能力の獲得と同程度に、限られた時間の中で辞書を参照することなく、文脈や状況、もしくはスペイン語圏の社会文化的な既習知識を動員して文の大意を把握する能力をやしなうことも外国語学習者には必要であり、これは読解能力のみならず、会話能力の向上とも関連している。会話の途中で未知の語や表現に遭遇する度に辞書で意味を確認するということを過度に繰り返しているようでは他者との間に円滑なコミュニケーションが成立するはずがないからである。

筆者が勤務する愛知県立大学スペイン学科の学生の多くは在学中にスペイン語圏に長期または短期留学を実行するが、現地の大学や語学学校では当然スペイン語ですべての授業が行われるし、初級の勉強をしている頃から多読や速読をすることに徐々にでも慣れておかなければ、スペイン語漬けの環境の中での授業活動や課題をこなす時に大きな困難に直面することになる。また、愛知県内外に多く在住する日系人と交流する機会も持つ学生もいる。このように、スペイン語専攻学生は、日本国内のスペイン語学習者の中では比較的母語話者と接触する機会を在学中に持てるため、辞書を参照する時間もないままに相手の発言の総意をくみ取ったり、表現意図を理解する能力の習得は必要不可欠である。

筆者は日本のスペイン語専攻学生はまだまだ読書量が十分でないと感じ、「講読」よりは「読解」を中心とした授業のあり方を模索してきた。現在ほぼ毎年担当しているのは2年生の授業であるが、3年生以上を対象

とした授業（ゼミ、外書研究など）で読む文章の難易度についても考慮の余地があるようだ。スペイン語専攻学生に高度な読解力を獲得させるにはどうすればよいのか、この問題について NCR が示している基準に沿って考察する前に、日本でスペイン語を勉強する大学生の語学力について次の 2-2. で検証してみる。

2-2. NCR が示すレベルと日本の大学のスペイン語学習者のレベル

まず初めにスペイン語に関する NCR の各レベルについて概略を述べる。セルバンテス協会のウェブページ Centro Virtual Cervantes はサイト内に MCER の全文を置いているため⁷⁾、誰でもこれを自由に閲覧やダウンロードできるようになっている。さらに、このウェブページ内の別のページにおいて、同協会が主催する DELE の各級が、第一章で言及した ALTE によって定められた NCR のどの段階に相当するかが明記されている。これによると DELE の Nivel Inicial は B1 (Umbral) レベルに、Nivel Intermedio は B2 (Avanzado) レベルに、そして Nivel Superior は C2 (Maestría) レベルにそれぞれ相当する⁸⁾。

すなわち、DELE の最下級である Nivel Inicial は、初級である A1 (Acceso) や A2 (Plataforma) よりも上のレベルに属する、いわゆる中級レベルである。また、最上級の Nivel Superior とその下の Nivel Intermedio の難易度にはやや差が開いている。C1 レベルに相当する DELE の新しい級の設置が今後待たれるが、ALTE が示した基準の中で DELE の各級が位置づけられて以来、DELE の各級の出題についても各レベルの能力記述文に沿った熟達度を測るという傾向が顕著になっている。従って、DELE については今後も何らかの多様化・細分化が進められる可能性がある。いずれにせよ、NCR のおかげで DELE の各級のレベルの差が多くのスペイン語教育関係者に明確に認識されるようになり、これはスペイン語教育界にとって大きな進展であった。

実のところ、DELE の多様化はすでに始まっている。ヨーロッパ域内では E/L2 教育が年々重要さを増しているという現実があるが、セルバンテス協会は2006年から Inicial レベルで DELE Escolar という11歳から17歳までの青少年向けの試験を実施している。この試験のフォーマットは通常の DELE Inicial と同じであるが、設問の内容が異なっている⁹⁾。スペインのみならずヨーロッパの多くの国で現在ヨーロッパ外から流入してくる移民

が増加しているが、定住によってその国の学校教育を受けることになった移民の子弟に対しても、ヨーロッパ評議会が推進している複言語主義に基づいた言語教育が行われつつあり、この新しい試験はスペイン語の母語話者ではないが学校教育の中でスペイン語を学ぶ若い世代に向けたものとなる。

NCR のレベル分けに関しては、MCER 第三章において、必要があるならば NCR の 6 つのレベルより詳細なレベル分けを行うことが奨励され、そのレベル分けの例も挙げられている¹⁰⁾。実際、日本でスペイン語教育に携わっている教師であれば、NCR の A1・A2 レベルの能力記述文の例を見て、初級レベルの学習者が圧倒的多数を占める日本のスペイン語教育においては、A1・A2 レベルをさらに細かく段階分けする必要性を多少なりとも感じることであろう。様々な理由から、半年や 1 年のコース終了時に受講生全員にそのレベルに到達することを期待するのは難しい場合があり、NCR の A1 や A2 レベルについては、第二外国語で週に多くて 2 時間（場合によっては 1 時間のみ）しかスペイン語の授業を履修しない受講生にとってはまだまだ高めの目標であるようと思われる。

NCR はヨーロッパ内で母語以外の言語を勉強する学習者を対象としてその理想的な熟達度を提示しているが、この水準は、日本語が母語でかつ日本でヨーロッパの言語を学習する者にとっては到達するのが必ずしも容易ではないように思える。赤木（2004）はコミュニケーションテストティングの条件を満たしていると結論づけられる DELE の概要等について詳細な報告を行っているが、シラバスを見る限り、DELE の各レベルは Nivel Inicial の場合でも、かなりの文法能力、社会言語能力、方略的能力が必要とされるとの見解を示している¹¹⁾。DELE の Nivel Inicial の過去問題に目を通してみると、日本語が母語で日本でスペイン語を学習する者にとっては DELE Inicial 受験はある程度の語学力がないと簡単に合格しそうにないような印象を受ける。

レベルの名称と現実の学習者のレベルの間に存在するギャップについては、泉水（2002: 45–46）にも同様の報告がある。日本やアメリカのスペイン語教師が「中級」と呼んでいるレベルが、スペインで外国人に教えているあるスペイン人教師には「初級プラスアルファ」程度に認識されていた。そうだが、確かに、日本で第二外国語でスペイン語を 1 年学んだ経験のある「中級」クラスの学生が ALTE の Level 3（すなわち NCR の B1）に相

当しうるかと問われた場合、我々教師の日常の経験から判断してやはりこれには疑問符がつくところであろう。

また、Sugahara (2005: 87-88) も日本の大学生向けスペイン語教材の中で “intermedio” レベルの教材は inicial レベルと同様のテーマを重複気味に取り上げていて、本当の意味での初級を超えた新たな内容があまり扱われていないことから、“intermedio” という名称への疑問を呈している。

これについては筆者にも似たような経験がある。愛知県立大学スペイン学科2年生向けの「スペイン語文法」を初めて担当する前に、使用する教材を決定するため、いわゆる中級向けとされている日本の教科書会社が出版した教材数冊の内容を同じクラスを担当する教員と共に調べた。しかし、候補に選んだいくつかの教材は内容に多少の相違はあるものの、概ね文法事項については、1年生対象の文法教材でどうしてもコースの終わりの時期に扱うために中途半端な説明や練習問題の消化だけで終わることが多い接続法の用法や時制、条件文などが主要なテーマとして多くのページが割かれていた。もちろん、これらの文法項目を「中級」の文法の授業で再度取り上げることに異論があるわけではない。しかし、初級文法の既習項目とは重複せずに「中級」の文法の授業で教えるべき事柄というものがもつとあるのではないか。そう考えてみて、いくつか思い浮かぶ構文はあったが、全体としては明瞭に意識される体系があまり思い浮かばず、筆者自身もスペイン語の「中級文法」についてこれまで非常に曖昧な概念を持ち続けていたことを自覚するに至った。

以上のように、スペインのELE教育事情の一端に触れた経験のある教師ならば、日本のスペイン語教育界で用いられる「中級」レベルの学習者の語学力が実際には初級と中級の中間ぐらいであることに気づくであろう。日本のスペイン語教育の水準はまだ向上の余地が大きいにあると言える。

しかし、この日本のスペイン語教育の問題をNCRと関連づけて考えてみると新たな側面が見えてくる。日本で日本人教師がスペイン語文法の授業を担当する場合、そのスタートについてはどこでも同じで、1年目はアルファベットから授業が始まる。しかし、スペイン語専攻学科の場合、1年のコースの終わりには接続法現在あるいは接続法過去完了ぐらいまで文法説明を終えてしまうのが通常のペースであろう。第二外国語の授業の場合、直説法現在までで終わる場合から専攻の授業並みのペースで授業が進む場合までより多様化していると思われる。他方、NCRの相当レベルが

明記されているスペインの出版社の ELE 教材を調べてみると、文法事項としての接続法時制は原則として B1 レベルから出てくる項目であることがわかる。つまり、日本で日本人教師による文法中心の授業を受けるスペイン語学習者は、スペイン語専攻学生の場合、1 年のコースを終えた時点で文法知識だけは既に NCR の「中級」レベルに進んでいることになり、第二外国語としてスペイン語を履修する学生の場合でも、その割合は不明であるが学習 2 年目の段階で同様のレベルに進む者が出てくるようになる。

このように日本の大学のスペイン語教育、特に日本人教師による文法知識や構文の説明を主体とする教育では、学習を開始して 2 年目のスペイン語専攻学生や一部の第二外国語としてのスペイン語履修者を「中級」とみなすことは、もし文法能力だけに話を限れば必ずしも例外ではないことになる。

しかし、語学能力は文法知識を身につけるだけで測れるものではなく、特定の場面や状況で用いられる表現を覚えたり、それに関連した語彙を増やしたり、単語の正しい発音や文化に関する知識を身につけたりするなど複数のスキルを獲得する必要がある。そして日本の大学でスペイン語を学ぶ学生はこの文法知識以外の部分が十分身についていないことが多いため、NCR の基準で測ると学習 2 年目の日本人学生のスペイン語はまだ B レベルの熟達度を持たない。すなわち、比較的成績がよい学生であってもその熟達の度合いは大抵の場合、初級と中級のあいだ程度ということになるのであろう。

2-3. スペイン語専攻学生のレベル

2-2.において NCR が示すレベルと日本の大学でスペイン語を学ぶ学生の実際の語学レベルの間に一般的に存在するギャップに言及した。次に、日本のスペイン語専攻学科でスペイン語やスペイン語圏の文化を学ぶ学生に期待されるレベルについて考察する。

これはあくまでも筆者の経験からの判断に過ぎないが、日本のスペイン語専攻学科で学ぶ学生の場合、卒業するには最低でも NCR の A2 のレベルに達している必要があると思われる。スペイン語専攻学科の卒業条件ならば本来、NCR での本来の中級、B1 レベル以上の到達を望むべきところだが、筆者がこれまでに教鞭をとった経験のある現在の本務校ほか 3 つの

大学でのスペイン語専攻学科の授業を思い起こすと、上級生でも全員問題なくB1レベルに達しているはずとは必ずしも確信を持って言えないのも事実である。2-2.で見たように、日本の学生は文法運用能力だけは他の能力よりも先行して身についているはずであるが、上級生になると文法についての授業を受けることがなくなったり、その機会が減ってしまったりすることで、1年生の時に習った初級文法の基本的な規則さえ忘れてしまっている学生も見受けられるのである。

B1レベル相当と認定されているDELE Inicialの問題文程度の文章を専攻学科の何年生ぐらいなら苦もなく読めるかを考えてみた場合、例えば、愛知県立大学スペイン学科の3年生以上の学生でもこれができるような学生もいれば、無理かもしれないと判断せざるを得ない学生もいて、専攻学科に在籍していても上級生になると各人の学力には明らかな差がついている。在学中にスペイン語圏に留学する学生が現地の大学や語学学校に入学したのち、DELE Inicialを受験し、合格するケースがあり、スペイン語専攻学生で本人の努力や周りの環境なども含めてスペイン語をしっかり勉強する時間を持つことができる上級学年の学生ならば在学中にB1もしくはB2のレベルに到達することが可能であろう。

ALTEの基準では中級の語学能力を測る試験と認定されるDELE Inicialは試験の手順説明も設問もスペイン語で書かれているが、複雑な構文があまりないので全般的に内容を理解しやすい。他方で、前後の文脈をしっかりと理解しないと意味が把握しがたいテクストも多く、この試験に合格するためには語彙力の充実と共に限られた時間の中でテクスト全体を読み取る速読の能力が必要なのはもちろんのこと、スペイン語だけしか書かれていなテクストを見てもひるまないよう、日頃から多読の習慣をつけて慣れておくことも重要である。

先に述べたように日本のスペイン語専攻学科の授業は文法知識獲得については早い時期に「中級」に進むが、それ以外の能力についてはそれほど早い進度で様々なスキルが身につけられるわけではない。それでもスペイン語専攻学科ではネイティブ教員による会話・作文の授業が受講できるし、社会文化に関する知識も講義科目などで履修することができるので、一般的にはスペイン語専攻学生は第二外国語でスペイン語を履修する学生に比べれば学習環境に恵まれていて、NCRのBレベルという文字通りの中級に到達する道が開かれていると言える。だからこそ、受講生全員が卒

業までに問題なく B1 レベルに到達していることが望ましいし、さらに B2 レベルまで到達するよう学生を導くのも我々教員の仕事であろう。B1 レベルをクリアした学生はスペイン語に親しみを感じ、教師が強制しなくても自主的に日本国内にいながらスペイン語に接する機会を見つけてくるほどの積極的な学習姿勢を示す傾向が見られるので、個人の興味や必要に応じた学習法を紹介することで彼らの学習のサポートをすることができるだろう。しかし、必ずしも学生全員が自発的に行動するわけではなく、学生がスペイン語学習やスペイン語圏の文化を日本国内にいても楽しむために何かしらの行動を起こすよう導くだけの工夫や動機付けを教師の側からも提供することを考えていかねばならないだろう。

セルバンテス協会がウェブページ上で DELE の合格者の割合を母語別に調査したデータを公表しているが、日本や韓国・中国の合格者の割合が少なく、スペイン語と言語構造がかけ離れた東洋の言語を母語とするスペイン語学習者は予想通りかなりのハンディキャップを負っていることを実感する¹²⁾。しかし、スペイン語と受験者の母語の言語構造が近ければ近いほど受験には有利なはずなのに、実際には DELE のどの級もポルトガル人の合格者よりドイツ人の合格者のほうが割合が高いという興味深い数字が出ているのも注目に値する。

本章では NCR のレベル認定と日本のスペイン語教育のレベル認定の間に存在するギャップに注目したが、MCER で参照可能な能力記述文に照らし合わせてみると、日本国内において初級もしくは中級と分類されているいずれのレベルにおいても取り組むべき課題が山積していることを実感する。スペイン語専攻学生には全員在学中に NCR の B1 レベルの語学力を身につけてほしいが、その実現のためには、大学入学後の 2 年間の間に、学生が A1、A2 レベルの能力記述文で示されている事柄をこなせるようなカリキュラムをたてる必要がある。もちろん、カリキュラムの問題は教師一人だけで決められる性格のものではなく、時間をかけて練り上げていかねばならないのでその改善は今後の検討課題の 1 つとなるであろう。しかし、NCR の基準に照らすとこれまでの日本のスペイン語初等教育は学習者に文法知識を授けることのみが先行していることは明白であり、初級レベルの学習者に何をどの程度まで教えるかについて今後再考の余地が大きいにある。1 年間で接続法過去完了まで教えることに時間を費やすよりも、その分タスク中心の活動やリスニングの時間を増やすことをスペイン語専

攻学科でも考えねばならないと筆者は考える。

次章では、ここ数年来筆者が関心を寄せているスペイン語の読解授業の運営や読解能力育成について NCR の基準を視野に置きながら考察する。

3. MCER と読解能力

3-1. スペイン語の教材

MCER の第 3 章で扱われる NCR や同書第 4、5 章に出てくる能力記述文の内容は、言語教育に携わる者が各自の教育環境の中で到達目標とするべきレベルや現時点で担当している生徒のレベルを判断するための指標となりうる。そして、本稿第 1 章にて言及したように、近年スペインで出版されている ELE 向け教材は MCER の名のもとに準拠しているレベルを明記するようになってきている。そんな教材の例として、Difusión 社の *Aula* や Edelsa 社の *Eco*、SGEL 社の *Español en marcha*、EnClave 社の *En acción*、Edebé 社の *Vive el Español* などがある。

また、2-2. で述べたように、ヨーロッパ内で増加しつつある移民に対しても、彼らが今後ヨーロッパで生活していく限り、ヨーロッパ評議会の理念に沿って母語以外の言語や文化を理解する姿勢が求められるが、そのような移民の子弟向けのスペイン語教材も同様のレベル明記が行われることになる。例えば筆者が入手した Galvin *et al.* (2006) は E/L2 の初級教材の練習帳で、この初級教材は NCR の A1-A2 レベルに相当する。その内容は日常生活や数学・音楽・美術など言語以外に学校で勉強する事柄が含まれ、スペインの社会文化知識についての言及も若干見られるが、全体の中ではその内容があまり目立つものではなく、このシリーズの教材がヨーロッパ（スペインとは限らない）で生活する青少年世代の移民を対象としたスペイン語教材であることがわかる。スペイン語の非母語話者という共通点は持っていても、移民の学習者と移民ではない学習者は置かれている立場や優先的に身につけるべきスキルがかなり異なる。したがって彼らを対象とした語学教材の内容もそれぞれ異なるものになるのは当然のことである。このように E/L2 としてスペイン語を学んだ若者の語学の熟達度は先述した DELE Inicial Escolar のような新しい試験によって測定するのが適切であろう。

移民ではない非スペイン語母語話者向けの教材に話を戻すと、既刊の

教材の中にも MCER のもとに準拠レベルを明示した新しいバージョンが発売されているものがある。例えば、Difusión 社の教材 *Gente* や Ediciones SM 社の教材 *Ele*、Edelsa 社の *Ven* などである。さらに、1974年初版以来ロングセラーを続けていた SGEL 社の教材 *Español en directo* は *En directo* という新しい名称と共に内容も前版から大幅に改訂されて Nivel elemental が A1 レベルに相当することが明記されている。このように、当面 MCER の基準に従ってそのシラバスが刷新される既刊教材や独自に新しく開発された教材の出版の動きが続くと思われるが、各社がどのような教材を世に出すか、スペイン語教育に携わる者としては今後の動向に注目せねばならない。

さて、次に MCER に準じた読解用教材の出版について調べてみた。ところが、こちらはまだ数が少なく、2006年時点で目につくのは Difusión 社の *Aventura Joven* シリーズで A1 レベル及び A2 レベルの教材が各 2 冊ずつという状況である。もっとも、MCER の理念は現在のヨーロッパの語学教育に着実に浸透しつつあるので、MCER に準拠した読解用教材も今後は徐々にその数が増えることだろう。

しかし、読解教材については従来から学習者の学力の違いに応じてレベル分けされた教材が各出版社からシリーズものとして刊行されてそれ相応の評価を得ている。例えば、Difusión 社の *Venga a leer* シリーズや Edinumen 社の *Lecturas de español* シリーズ、Arco/Libros 社の *Lecturas Graduadas* シリーズ、Espasa Calpe 社の *Es para leer* シリーズ、Edelsa 社の *Para que leas* シリーズなどである。この種の教材のレベル分けの根拠はシリーズごとに異なるが、概ね学習者のスペイン語学習歴もしくは語彙力に従っている。上述した教材に明記されたレベルの名称と各レベルについての記述は以下の通りである。

Venga a leer シリーズ (Difusión 社)

Nivel 0 principiantes en el primer año de estudios

Nivel 1 principiantes en el primer año de estudios

Nivel 2 falsos principiantes, finales del primer año de estudios

Nivel 3 estudiantes intermedios

Nivel 4 estudiantes avanzados

Nivel 5 estudiantes en los cursos superiores

Lecturas de español シリーズ (Edinumen 社)

ELEMENTAL I : después de unas 50–60 horas de clase

ELEMENTAL II : a partir de unas 100–120 horas de clase

INTERMEDIO I : a partir de unas 160–180 horas de clase

INTERMEDIO II : a partir de unas 220–240 horas de clase

SUPERIOR I : entre 300–500 horas de clase

SUPERIOR II : a partir de las 400 horas de clase

Lecturas Graduadas (Arco/Libros 社)

nivel 1 Nivel inicial: hasta 800 palabras; gramática básica

nivel 2 Nivel intermedio: hasta 1.200 palabras; complejidad grammatical media

nivel 3 Nivel avanzado: hasta 1.600 palabras; complejidad grammatical avanzada

nivel 4 Nivel superior: hasta 2.000 palabras; gramática superior

Es para leer シリーズ (Espasa Calpe 社)

inicial A Base léxica en torno a las 300 palabras

inicial B Base léxica de 300–600 palabras

intermedio A Base léxica de 600–1.100 palabras

intermedio B Base léxica de 1.100–1.600 palabras

avanzado A Base léxica de 1.600–2.000 palabras

avanzado B Base léxica superior a las 2.000 palabras

Para que leas シリーズ (Edelsa 社)

1 から 5 までのレベルが存在するが、Nivel Umbral としてヨーロッパ評議会推薦の語彙を使用しているということが表記されているだけで、他シリーズのように明確なレベル別の基準は示されていない。

スペイン語学習歴の長さや学習者の語彙数は読解教材選定に際して考慮すべき重要な要素であるが、“Can-do” 形式で学習者の語学能力を肯定的に認めようとする ALTE が示した基準はこれらの要素をも含めての学習者の能力判断であると言える。

3-2. “Aventura Joven” シリーズ

ここでは MCER に準拠したレベルが明記されている Difusión 社の読解用教材 “Aventura Joven” シリーズについて述べる。筆者は今年度愛知県立大学スペイン学科 2 年生対象の「基礎スペイン語講読」の授業（週 1 回）で前期にこのシリーズの A1 レベルの教材 (Sancho y Surís (2005a)) を、後期に A2 レベルの教材 (Sancho y Surís (2005b)) を使用している。後者の教材は本稿執筆時点で使用中であるため、これについての感想・考察は必ずしも十分なものとは言えないかもしれないが、いくつか気づいた点を指摘したい。

まず、前期に使用した Sancho y Surís (2005a) であるが、これはスペインの若者たちが主人公として活躍する短編物語で本文 30 数ページと読後に解く問題集により構成されている。筆者の読解の授業では、受講生にあらかじめ該当箇所を読んでくるように求めた教材のテクストについて 90 分授業の半分の時間を割いてその内容の理解を求めた。そして、残りの半分の時間は受講生に内容を予告していないテクストを配布し、これを辞書の助けなしに制限時間内に概要を把握するよう指示し、自分の言葉で要約させた。Sancho y Surís (2005a) は問題集と共に巻末にその解答もつけられている。すなわちこれは自習用としても使用可能な教材であるが、そのような教材であるがゆえに授業中に問題集の答えを学生に尋ねるのは無意味であると考え、問題そのものを「解く」ということは行わなかった。しかし、問題集を全然利用しなかったわけではなく、問題集の各質問はどのような解答を要求しているのかということ、つまり問題集の設問部分のスペイン語の意味を時折学生にたずねて説明を求めた。このような本には問題の答えは書かれているが、スペイン語で書かれた質問が何を要求しているかまでは解説されていることはない。しかし、将来スペイン語圏で勉強する予定の学生はスペイン語で書かれた質問の意図を即座に把握する能力が求められる。従って、練習問題の問い合わせの文章そのものを読解する訓練が必要である。

この本において文中使用されている動詞の時制は直説法現在形と現在完了形である。会話形式の文が多いので命令形も頻出するが登場人物のほとんどが若者なのでその大半の形式は二人称の肯定命令形である。NCR の A1 レベルで必要とされる動詞の知識はこの程度であり、他の A1 レベルの教材でも多少の違いはあってもほぼ似たような傾向が見られる。物語の後

半に警官が登場する場面で初めて “Circulen” や “Oiga”、“Dígame” という形態が登場するが、最初の “Circulen” のところで、

circulen : Imperativo del verbo circular, tercera persona del plural. **Circular** : moverse en una dirección. No quedarse parado. (Sancho y Surís (2005a: 32))

という注釈が付記されている。それ以後出てくる単語には特に注釈はなく、この **circular** についての注釈もまず形態についての説明が最初に来る。三人称 Ud. もしくは Uds. に対する命令形三人称は A1 レベルでは未習事項なのである。

このように A1 レベルでは動詞の時制のうち使用されるものが限られている上に、テクスト中の文の大半は比較的単純な構造を持つので、この読解用教材の場合も辞書を使うことを許されるのであれば、スペイン語専攻学科 2 年生前期の段階で読むのはさほど難しくはないはずである。

その他、いくつか気づいたことを列挙してみる。まず、物語の舞台はマドリードで、実在の地名や固有名詞が出てくるがその多くにはスペイン語による簡単な注釈が添えられている。そして、若者たちが主な登場人物ということもあり、彼らがよく使う口語的な語彙 (*chulo, guay* など) が用いられる。また、スペイン独自の表現と言われる *Vale!* の他、アルゼンチンからの移民の少年も登場するため、*viejos* (→両親) や *plata* (→お金) というアルゼンチンのスペイン語の語彙も解説付きで登場する。しかし、最も筆者の印象に残ったのは、若者たちが携帯で SMS を送る時に用いる独特の省略文字で構成されたテクストが何度か登場したことである。例を挙げてみよう。

- 1) «stamos n la cye, cerca d la prada d mtro rturo sria. vmos a cjer 1 mtro pa ir al reina sfia y vr 1 grnika. pdemos kdar dspues n 1 retiro» (Sancho y Surís (2005:12))
- 2) Sergio saca su teléfono móvil de la mochila: «e vsto 1 atrko. yo toy bien», escribe, «dspues ablamos». (Sancho y Surís (2005: 26))

もちろん、1) 2) いずれも本来の正しい文章が注釈としてつけ加えられている。このような規範を逸脱したテクストを ELE 用教材の中で取り上げることには賛否両論あるかもしれないが、現在この SMS 独自の文字を使って携帯メールでやりとりしているスペインの若者が多いことは事実であり、できるだけ現実のコミュニケーションに近い状況を作り出し、かつ社会文化的知識としてこのような現在のスペインの文化のある一面をも読

者に伝えようとするこの教材の著者の意図は理解できる。

このように現実世界になるべく近づけた状況設定はストーリーの随所に見受けられる。別の例では、バルセロナ在住という設定の移民の少年が書いた作文の宿題の文面というテクストの中で、現在スペインにおいて増えつつある移民たちの日常生活やスペイン国内の多言語地域について簡単に触れられている。(pp. 21-22.) 主人公たちはマドリードの旧市街を動き回り、最後には奇想天外なストーリーが展開するが、その舞台となるのが *el Centro de Arte Reina Sofía* や *El Retiro, Estación Atocha, Plaza del Sol* など実在する有名な場所であるため、実際にその場所を見知っている者にとってはこのストーリーは結構楽しめるかもしれない。ただし、日本でスペイン語の学習を始めて 2 年目の学生の大半はまだスペイン滞在経験を持っていないことが多いので、彼らに対しては事前にこの実在する場所の固有名詞について解説が必要となる。舞台となった地域の地図もこの本の問題集の中で出てくるので参照するのに便利である。その他、スペインを代表する画家ピカソや彼の名作「ゲルニカ」についての説明があったり、スペインのピソのオートロックシステムへの言及もある。このような事項は教材内の注釈だけでは説明が十分ではないかもしれません、教師が可能な限り補足説明を行うことも必要となってくるだろう。

また、この物語のクライマックスの追跡劇の場面を初めて読んだ時、筆者は以前見たことのある Pedro Almodóvar 監督の “Mujeres al borde de un ataque de los nervios” のワンシーンをふと思い起こしたのだが、まさしくこの本の著者はそのシーンにインスピレーションを得たと注釈の中で述べている。(p. 36) ここで Almodóvar 監督や上述のシーンについても授業中に解説を加えることでスペイン文化についてさらに多くのことを学習者に教えることができるだろう。このように、Sancho y Surís (2005a) では A1 レベルという初級の教材ながらも、現実のコミュニケーションになるべく近いやりとりを主人公たちにさせ、舞台設定もできるだけ現実のものに近づけて、学習者にスペインという国の現状や文化・生活の一端をも学ばせるような配慮が見られる。

続いて、筆者が授業で現在使用中の A2 レベルの読解教材 Sancho y Surís (2005b) を取り上げる。そのストーリーの分量は 40 ページ弱で前期に使用した Sancho y Surís (2005a) よりやや多い程度である。ただし、後者の教材については前期の最初から最後までの授業を使って読み進めたが、前

者の教材については1回の授業のために予め読むことを義務づける分量を若干増やした。つまり、授業90分の半分を使って読むことは前期の時と変わらないが、後期授業回数の3分の2程度でこの教材を読み終える予定である。

この教材で使用されている動詞の時制は、直説法現在に加えて、直説法点過去・線過去・現在完了・未来であり、比較的使用頻度の高いものばかりである。登場人物の大半が若者であったため会話が *tuteo* 主体であった *Sancho y Surís (2005a)* とは異なり、今度の作品では大人である先生や学校の職員も登場するので、*Ud.* や *Uds.* に対する命令形も出てくる。ただし、A2 レベルでは接続法が未習事項であるためであろうか、接続法現在形の形態を代用する *Ud.* や *Uds.* に対する命令形はめったに登場しない。*Sancho y Surís (2005b)* で新たに登場した時制は多いが、日本のスペイン語専攻学科の学生ならばこれらの時制も前年度に習得済みなので、辞書さえ使用すれば、この教材も彼らにとっては何とか内容を把握できるレベルのものであるようで、大半の受講生はストーリーの要約もできるし、大体文意を掴めているらしいことが問答法その他の確認手段によって確認できている。

Sancho y Surís (2005b) のストーリーの舞台は前作と違ってバルセロナであるが、同じ *Aventura Joven* シリーズの教材を引き続き使用したので、通年で筆者の授業を受講した学生にとっては、舞台設定は同じではないけれど前期の教材に出てきたのと同じ登場人物たちにまた物語の中で遭遇することになる。それでも、前作の中で簡単ではあったが主人公の若者たちの紹介・描写があったためか、登場人物に多少なりとも親しみが持てるという感想を持った学生もいた。

Sancho y Surís (2005b) では、主人公の若者たちの学校がストーリーの舞台するために、スペインの学校のシステムや授業についての語彙や説明が出てくる。(例：*ESO, crédito de síntesis, Ciencias Naturales* など) また、この作品独自の特徴かもしれないが、地の文よりも登場人物たちのやりとりがストーリーのかなりの部分を占めている。よって、*Sancho y Surís (2005a)* よりも難易度が上がっているが、前作同様、複雑な構文があまり出てこないので語彙力と動詞の時制の活用が身についていれば、*Sancho y Surís (2005b)* は同 (2005a) と共に比較的読みやすい作品であるように思える。

以上のように、今年度は MCER に準拠した A1 と A2 レベルの読解用教材を学習 2 年目のスペイン語専攻学生に読ませている。A2 レベルの教材を読み終えた後は、この A1、A2 レベルの読み物を今度は辞書の助けを借りないで速読できるような訓練により多くの時間を割く予定である。辞書を参照しながら予習に好きなだけ時間を費やせる状況ならば、大半の学生は既習の文法知識も利用してこのレベルの教材を読んで意味を理解することができる。しかし、学生に初めて目にするテクストを辞書を使用することなしにぶつけ本番で読ませると、未知の語彙や表現の意味を前後の文脈や常識的な知識から類推する能力はまだ十分持っていないと思われる学生が少なくないことがわかる。しかし、この類推能力を引き出すための適切な教材を探すのもそれほど容易なことではない。本章の最後に、初級から中級にかけて求められている読解能力獲得のために読むのが望ましいと思われるテクストのジャンルについて考えてみる。

3-3. 教材の種類

江澤 (2000: 94-95) において学習者のレベルに合った教材を選択することの難しさを指摘したが、この問題は未だに完全には解決していないことを認めねばならない。先述したように、スペイン語の読解教材には ALTE が各レベルを定める前から学習者の学力別のシリーズが存在するが、その大半は 1 冊の分量が 20~30 ページぐらいで、しかも内容は物語である。この種の教材が学習上の様々な点に配慮しながら編纂されていることについては 3-2. の “Aventura Joven” シリーズで検証した通りであるが、この種の教材を大学の授業の中で使用するとなると、あらかじめ学生に予習を求めて、それを読み解くという授業運営をせざるを得ない。それは別の見方をすれば、学生が辞書を参照して未知の語彙の意味をあらかじめ調べてくるのを禁止し難いということであり、このような教材はその場で意味を類推させるような多読・速読の訓練には使いづらい。もちろん、専攻学科の学生には精読をしてもらう必要もあるので、この目的のためにレベル別読解教材を授業中に使う意義はある。

授業の中で多読・速読の訓練を行う際は、可能ならば 1 回の授業の中で一話完結の教材をいくつも読み進めるぐらいのペースの授業運営をするほうが望ましいと筆者は考える。ところが、こういう目的のために使える教材を見つけるのが案外難しい。インターネットから読解教材のネタを収集

することもしばしばあり、内容が面白そうなもの、時事ネタを扱ったものを見つけるのはさほど苦労しないが、その多くはスペイン語専攻学科2年目の学生が辞書を使わずに読むには難易度が高すぎるのである。MCERとそれに準拠したELEテキストの内容の検証を試みたおかげで、学生に読ませるのが適切と思われるテキストの難易度について以前よりはそのイメージが明確なものになってきたが、学生のレベルに合致した教材選びを現実に行うにあたってはまだ多くの課題を抱えたままである。

解決がつかない難易度の問題は今置いておくとして、それではどんな内容のテキストを初級から中級レベルを目指す学習者向けに選ぶべきだろうか。MCERの4.4.2.2.では読むことに関して5つの尺度が示され、それぞれに対して能力記述文が提示されている。この尺度の中で第1番目の「包括的読解」以外の四つは文の内容について言及している。すなわち、通信文(*correspondencia*)、世情の把握(*para orientarse*)、情報や議論(*en busca de información y argumentos*)そして説明書(*instrucciones*)である。

人間は日常生活の中で常にストーリーを持つテキストだけを読むわけではない。バランスの取れた読解力を養いたいのであれば、物語はもちろんであるが、それ以外のテキストももっとたくさん読む必要がある。そして、スペインで発行されているELE教材には以前から手紙文や記事、看板、広告、説明書、図表など物語とは異なるタイプのテキストが見受けられたが、MCER準拠レベルが記されているどのELE教材にもこの種の「読み物」が掲載されていて、これらが伝える情報を読み取る能力を身につけることも読解能力育成のために必要不可欠であることに改めて気づかされる。日本での講読の授業では通常ストーリーを持たない文章を読み取るという活動をほとんどおこなわない。筆者の読解の授業では時々これらの「読み物」を教材にすることがあるが、このような教材が伝える情報を読み解くことにそれほど積極的な意義を見出していくなかったように思う。しかし、これらの「読み物」の多くは分量が少ないので1回の授業の中で読解を終えることが可能である。ストーリーものが速読の訓練に使いにくいのであれば、このような「読み物」こそもっと積極的に速読訓練教材として活用すべきであろう。

MCERの4.6.3.によると、数多く列挙された書き言葉のテキストタイプの例の中には、製品の包装やラベル、切符、申込用紙と質問用紙、辞書、データベースなど色々なものが含まれる。実際には教室での活動にこれら

を教材として使うことを考える場合、何でも OK というわけではなく、やはりテクストの難易度やその他の理由からある程度の取捨選択が必要となるだろうが、このような教材が伝える情報を掴むのも「読む」という行為に含まれるということを学習者に認識させたほうがよいのは確かである。学生の中には読書はどうも苦手という者もいて、書籍に近い形状のものを読むことに苦手意識を持つ場合があるが、テクストをもう少し広い意味でとらえ、それの「読み」も授業活動に取りいれることで授業の活性化も期待できるだろう。

また、単に文章を読むだけではなく、それに反応して話したり、書いたりという別の行動ができるようなアクティビティーを考案すると、読解能力だけではなく、他の能力向上のための訓練にもなるだろう。このような活動も実行するとなると授業運営も再考の余地があるが、授業で扱うテクストの幅を広げるのは授業の可能性の拡大に結びつくし、読解能力の向上だけにこだわらない授業形式については検討する価値があると筆者は考える。

4. おわりに

他のヨーロッパ諸国と同様、MCER の導入によってスペインの語学教育は様々な影響を受け現在に至っている。本稿ではその変化や傾向を如実に反映していると思われる ELE 教材を通して MCER がスペイン語教育に及ぼした影響について検証してきた。

また、日本のスペイン語教育、特にスペイン語専攻学科の学生の学力について考察した。日本でスペイン語を学ぶスペイン語専攻学科の学生たちは文法知識については詰め込みと言えるペースで教えこまれているが、他の分野については文法知識のレベルほどには高度な知識が身についていない。そのため、日本の教師による学生のレベル認定とスペインの ELE 教育の中でのレベル認定にはギャップが存在する。このギャップ解消のためには ALTE によって定められたレベル、すなわち NCR の各レベルに達している者ならばできると見なされている能力の全容を知り、もし日本の学生にそのうちの何かが欠けているとすればそれを補い、習得させるような活動を授業を通じて行う必要があるだろう。

学生の読解力を向上させるためにどんな教材が使えるか、MCER は数

多くの可能性を示唆してくれたので、今後その効果や妥当性について日本の事情に合わせてさらに検証する必要がある。

予習が必要な読解の授業のうち特に初級レベルでは、新聞記事などの生教材よりもある程度語彙数や文法項目、表現などがコントロールされたELE教材を読むほうが適切であると筆者は思っているが、すでに述べたように、現在、MCERに準拠した読解用教材はまだ数が限られていて選択の余地が少ない。中級レベルに到達するには読書量がまだまだ不足している日本のスペイン語専攻学生には、易しいレベルの文章をできるだけ多く読んでもらいたい。この種のレベル別教材の充実が一日も早く実現してほしいと願っている¹³⁾。

速読用教材については、「読む」という行為を広い意味でとらえ、日常生活を送る中で我々が読み取っている情報をスペイン語でも同じように読めるような能力を学習者に習得させる必要がある。教材の質や難易度については十分考慮する必要があるが、従来の日本の講読の授業では教材として用いられなかった素材を読解の対象とすることで、「読む」という行為に新たな意味づけを与えることになる。スペイン語の受講生がそこに学ぶ楽しさを見出してくれればと思う。

MCERの提案の中には読みづらく、理解困難な内容のものも少なくないが、各言語活動ごとに記された能力記述文やその他の数々の提案は教師にとって具体的に考えるヒントを与えてくれるものが多い。日本独自の事情を考慮に入れながら、授業で取りいれられる要素の導入を少しづつ考えていきたい。

最後に、筆者自身は日本在住のため、ヨーロッパの多言語多文化的な状況はごくたまにその中に身を置くぐらいで自分にとって日常的な事態ではないが、外国語習得に興味を持つ一人として、ヨーロッパ評議会が目指す複言語主義的な環境下の人的交流や複数の言語使用に深い関心を寄せている。今回言及はしたものの紙幅の都合で十分に触れることができなかつたALTEの定めた基準やPELの検証については今後の課題としたい。

注

- 1) この執筆された枠組みの正式名は *Common European Framework of Reference for Language: learning, teaching and assessment* である。現在、複数の言語に

翻訳出版され、かつインターネット上のサイトでダウンロードも可能である。日本での略語はこの英語名より通常は CEF が使われる。本稿ではスペイン語訳の *Marco Común Europeo de Referencia para las Lenguas: Aprendizaje, Enseñanza, Evaluación* より、スペインの教育関係者の論文等で多く用いられている MCER を略語として用いることとする。

MCER で提唱されている個々の具体的な事項は言語教育関係者にとって興味深い内容に満ちているが、MCER の各章の連関がわかりにくく、非常に読みづらい。従って、MCER については、ネット上で入手可能なスペイン語版及び書籍の英語版と日本語版すべてを参照した。なお、スペイン語版と日本語版はオリジナルの英語版の必ずしも忠実な翻訳ではない。また、巻末付録である DIALANG の評価や ALTE の “las especificaciones «Puede hacer»”（原文の英語では “Can Do” statements）は日本語版では版権の関係で翻訳されていないが、特に後者は評価の問題を考えるにあたり参考にすべき点が非常に多いことを付記しておく。

- 2) 英語では “European Language Portfolio” と呼ばれる。
- 3) 「共通参考レベル」は MCER 日本語版での訳語。英語では “Common Reference Levels” と表現されている。
- 4) 本稿執筆時点で未入手であるが、SM 社の DidactiRed シリーズ全 6 巻は、Centro Virtual Cervantes のコンテンツの 1 つである DidactiRed のコーナーにて参照可能な教授法のアイデアを分野別に MCER の基準も考慮に入れながら書籍化したものである。
- 5) 日本では一部の研究者が関心を持ち始めているが、この分野の研究報告はまだ十分であるとは言いがたい。それでもスペイン語関連の先行研究が皆無というわけではない。赤木 (2004) は NCR の中でその熟達度を位置づけられた DELE を取り上げ、スペイン語能力判定試験としての DELE の妥当性を検証している。また、小川 (2006) は MCER の紹介によって日本のスペイン語教育論への新しいビジョンの導入を図っている。「紹介」という表現が象徴するように、現在の日本において MCER はスペイン語教育関係者の間でも必ずしも知名度が十分とは言えない。
- 6) 日本でも今年 (2006年) に入ってから MCER の読書会が有志により運営されているスペイン語教育研究会 (東京の GIDE と関西の TADESKA) において相次いでスタートした。これにともないスペイン語教育に従事する教師間の意見交換は今後一層盛んになることが予想される。しかしながら、日本の大学でスペイン語教育を受ける大多数の学生は第二外国語でスペイン語を履修する学生であるため、上記の研究会でも第二外国語としてのスペイン語クラスにおける教授法についての意見交換が中心となるのはやむを得ないのであろう。とは言え、スペイン語専攻の学生向けの語学教育も第二外国語とし

てのスペイン語教育と同じく、アルファベットから勉強が始まるので、NCR の A1 や A2 レベル到達に必要な語学力をめぐる議論はスペイン語専攻学生向け教育にとってもけっして無関係なものではない。

- 7) <http://cvc.cervantes.es/obref/marco/> を参照。
- 8) <http://diplomas.cervantes.es/general/alte.jsp> を参照。なお、セルバンテス協会は ALTE に加盟している。
- 9) セルバンテス協会のウェブページのコンテンツ内にダウンロード可能な DELE の各級の問題の見本があり、そこで従来の Nivel Inicial と Nivel Inicial Escolar の問題の相違を比較参照できる。
- 10) MCER スペイン語版の pp. 34–38. を参照。
- 11) 赤木 (2004: 117) を参照。
- 12) <http://diplomas.cervantes.es/general/rendimiento.jsp> を参照のこと。2005年 5 月のデータが掲載されている。(2006年10月現在)
- 13) 本稿の読解授業の狙いである、「MCER に準拠してレベルが明記された、辞書なしでもなんとか読めそうな初級レベルの ELE 用読解教材」という主旨とは外れるため、参考程度の紹介にとどめるが、H KLICZKOWSKI 社の mini letras シリーズは、スペインで発行されている ELE 読解用教材のシリーズものと同じぐらいのお手軽なサイズと分量の、著名な作家によって書かれた短編集シリーズである。このシリーズの読み物は ELE 用教材ではないので、スペイン語専攻学科の学生が読もうとしてもおそらく辞書を何度も参照したり、教師の適切な補足がないと理解しにくい箇所も多いかもしれないが、Arturo Pérez-Reverte, Antonio Muñoz Molina, Elvira Lindo, Juan José Millás などの当世きっての作家たちの作品を味わえる上級学習者向けの読み物である。筆者は初級レベルの授業で受講生に文学作品を読ませることを全く考えていないが、十分に読解力を身につけたスペイン語学習者にはいずれこのような作家たちの作品を存分に味わってほしいと思っている。

Bibliografía

- AA. VV. (2005) *Carabela 57*, Febrero 2005, SGEL.
- AA. VV. (2006) *Carabela 58*, Diciembre 2005, SGEL.
- 赤木浩文 (2004) 「7. 第二言語としてのスペイン語能力測定テストについて」『平成15年度「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究」報告書 世界の言語テスト I』独立行政法人 国立国語研究所. 100–118.
- Council of Europe (2004) *Common European framework of Reference for Languages: learning, teaching, assessment*, Cambridge University Press.
- 江澤照美 (2000) 「「講読」から「読解」へ——スペイン語の授業改善の試み

ヨーロッパ言語共通参照枠 (MCER) と日本の大学におけるスペイン語教育

- 」『愛知県立大学外国語学部紀要（言語・文学編）』32, 93–114.
- Fernández, Sonsoles (2003) *Propuesta curricular y marco común europeo de referencia. Desarrollo por tareas*, Editorial Edinumen.
- Galvin, Isabel et al. (2006) *Español como segunda lengua: Educación Secundaria: proyecto Llave maestra. Cuaderno de Actividades*, Español Santillana.
- 小川雅美 (2006) 「Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment について」 関西スペイン語研究会第290回例会 研究発表ハンドアウト (2006年3月25日).
- Sancho, Elvira y Jordi Surís (2005a) *Persección en Madrid*, Difusión.
- (2005b) *El fantasma del instituto*, Difusión.
- 泉水浩隆 (2002) 「マルチメディア教室を用いた中級スペイン語読解クラス」『ロマンス語研究』35、日本ロマンス語学会、43–56.
- Sugahara, Akie (2005) 'Análisis y crítica de los manuales de ELE publicados en Japón en los años 90' en Gómez Asencio, José y Jesús Sanchez Lobato (dir.) *Forma 9: cursos y métodos*, SGEL., 85–114.
- 吉島茂 (他) 訳・編 (2004) 『外国語教育 II 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』朝日出版社.

(3-1. にて言及したスペイン語の教材やシリーズ名についてはここでは割愛する)

参考 URL アドレス

http://www.coe.int/t/dg4/linguistic/Source/Framework_EN.pdf

MCER のネット版 (英語) (PDF 形式ファイル)

<http://cvc.cervantes.es/obref/marco/>

MCER のスペイン語版 *Marco común europeo de referencia para las lenguas: aprendizaje, enseñanza, evaluación*, Anaya (PDF 形式ファイル)

<http://www.dokkyo.net/~daf-kurs/library/CEF.pdf>

MCER の日本語版『外国語教育 II 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』(PDF 形式ファイル)

<http://cvc.cervantes.es/aula/didactired/>

Centro Virtual Cervantes のコンテンツの 1 つである DidactiRed

<http://diplomas.cervantes.es/general/alte.jsp>

セルバンテス協会の HP 内のコンテンツ Lengua y enseñanza の中で ALTE と MCER に関するページ

<http://diplomas.cervantes.es/candidatos/modelo.jsp>

セルバンテス協会の HP 内のコンテンツ Lengua y enseñanza の中で DELE の問題の見本が置かれているページ

<http://diplomas.cervantes.es/general/rendimiento.jsp>

セルバンテス協会の HP 内のコンテンツ Lengua y enseñanza の中で DELE の受験者に対する合格者の母語別の割合が掲載されている

El Marco común europeo de referencia para las lenguas
(MCER) y la enseñanza de ELE en las
universidades niponas
— las clases de lectura y sus materiales didácticos —

Terumi EZAWA

El MCER ha dado una gran influencia a la enseñanza de las lenguas europeas. Con sus niveles comunes de referencia se han publicado las nuevas versiones de manuales de ELE y llegamos a saber mejor cómo son los niveles de dominio lingüístico a través de los descriptores de niveles comunes de referencia.

Muchos de los estudiantes japoneses de español que han adquirido las reglas gramaticales del nivel "intermedio" no alcanzan ese nivel en cuanto a las destrezas lingüísticas. Los del departamento de estudios hispánicos en las universidades japonesas también tienen el mismo problema. Los profesores japoneses de español tenemos que volver a diseñar el currículo a la luz del MCER y motivar a los estudiantes en el aula.

Hemos averiguado unos nuevos manuales de lectura basándose en niveles comunes de referencia y nos dimos cuenta de que sería necesario utilizar más diversas clases de texto como material didáctico de lectura. El MCER da muchas sugerencias para los profesores japoneses de español, así que creemos que mejorar nuestra clase inspirándonos en ellas.